

令和7年度 花・野菜技術センターで研究中の主な試験課題（資材、除草剤、殺菌殺虫剤の実用化試験は除く）

課題名	担当G	研究期間	内容
1 オリエンタルユリの定植日を起点とした気象データやハウス内環境データの活用による収穫日予測の検証	花き野菜G	R7	収穫日の予測技術の確立に向けて、ユリの主産地（新潟県、高知県、埼玉県）の研究機関と連携し、共通の計測機器による生育温度等のデータの収集や収穫日の調査を実施する。
2 干ばつ時における不活着等の被害に対応できる露地園芸作物の育苗・定植技術の開発	花き野菜G	R7～R11	ブロッコリーとレタスを対象に、環境配慮資材を活用した干ばつ被害の軽減技術を実証試験を行う。
3 高温期の作型におけるにんじん、だいこんの品種特性調査	花き野菜G	R7～R8	青果用にんじんについては収穫適期幅、加工および青果用だいこんについては軟腐病や生理障害の発生に着目して、高温期の作型における品種特性を明らかにする。
4 ブロッコリーの夏季安定出荷技術の開発	生産技術G 花き野菜G	R7～R9	花蕾品質向上のための灌水法を組み込んだ晩春まき（8月どり）作型の安定生産技術と、コンテナ態の貯蔵法の検討による春まき（7月どり）作型の出荷時期調整技術を開発する。
5 低コストかつ効率的な土壌消毒を前提とした施設トマト栽培技術の開発	花き野菜G 生産技術G	R6～R8	施設トマト栽培において、土壌消毒を容易に低コストで実施できる側面根域制限栽培によって通常の栽培と同等の品質・収量性を確保した栽培技術を開発する。
6 長期どり可能な春どりいちご品種の開発	花き野菜G 生産技術G	R6～R8	これまでに育成した有望系統を活用し、長期どり可能な春どり栽培向けいちご多収品種を開発する。また、今後の道産いちごの生産振興への活用に向けた特性把握を行う。
7 赤色LED照明技術を用いた秋切りトルネードの省力・品質向上の現地実証	技術研修G	R6～R7	赤色LED照明は省力・省エネルギーでありながら、短日処理と同様な効果が認められており、本技術の速やかな普及を目指すため、現地実証試験を行う。
8 水稲複合経営におけるにんにく安定生産技術の確立	花き野菜G 生産技術G	R6～R8	越冬前に適正な生育量を確保できる栽培技術、球肥大を抑制する高温・少雨に対応した栽培技術およびさび病の防除対策を検討し、現地での実証試験を行い、安定生産する栽培法を確立する。
9 北海道のにんじん栽培におけるプラスチックを用いない緩効性肥料の施用技術の実証	生産技術G 花き野菜G	R6～R7	にんじん栽培の効率化のために従来使用されていたプラスチック被覆を用いた緩効性肥料に代えて、プラスチックを用いない化学合成緩効性肥料の利用技術を実証する。
10 にんにくのマルチング栽培におけるプラスチック被覆肥料を用いない緩効性肥料の施用技術の実証	生産技術G	R7～R8	にんにくのマルチング栽培において、プラスチック被覆肥料を用いない緩効性肥料の施用効果およびプラスチック被覆の緩効性肥料に対する置き換え可能性を明らかにする。
11 肥料価格高騰と養分収支を考慮したたまねぎに対する適正施肥量の確立	生産技術G	R6～R7	リン酸・カリの施肥量が比較的多いたまねぎを対象に、肥料価格高騰を考慮し、養分収支に見合ったリン酸・カリの適正施肥量を確立する。
12 花ゆりの栄養障害簡易診断手法の開発	生産技術G	R5～R7	花ゆりの栄養障害の簡易・迅速な診断および初動調査に資するため、微量要素の欠乏・過剰症の症状を体系的に整理したビジュアル資料を作成するとともに、AIによる栄養障害の画像分類手法を開発する。
13 アダプティブ MAP システムを用いたブロッコリーの高鮮度流通に関する研究	生産技術G	R5～R7	青果物用鮮度保持技術「アダプティブ MAP システム」について、道産ブロッコリーを対象に長期保管や輸送時の環境を想定した試験を通して、鮮度保持効果を明らかにし、その利用条件を整理する。
14 農業副産物を活用した高機能バイオ炭の製造・施用体系の確立	生産技術G 花き野菜G	R5～R9	キャベツに対するバイオ炭施用の影響を調査し、連年施用による土壌物理性向上等による生育・収量等への影響や土壌炭素やGHGへの影響を明らかにする（高機能バイオ炭施用の効果現地実証試験）。
15 アスパラガス枠板式高畝栽培システムの展示	花き野菜G	-	令和6年度まで取り組んだ試験課題「北海道におけるアスパラガス枠板式高畝栽培システムの適性評価」で用いた収穫作業の負担軽減につながる枠板式高畝栽培システムを展示する。